



人文科学とコンピュータ研究会(CH)

相田 満 国文学研究資料館

研究会の概要

「人文科学とコンピュータ研究会」(略称 SIG-CH) は 1989 年 5 月 1 日に国立民族学博物館を会場に第 1 回研究会(初代主査:杉田繁治)が開かれた, 創設 18 年になる研究会です。

本研究会は, 人文科学分野へのコンピュータ応用を目指して,

1. ハード・ソフトの開発・事例
2. 研究手法(処理技術)の開発・事例
3. 学際的研究や理論的研究

を行っています。

現在の運営形態は, 年 4 回の研究例会と, 査読をとまなう年 1 回のシンポジウムの計 5 回の研究会活動を定例としていますが, その形ができあがった節目は, 1995 年から 4 年間続いた重点領域研究(現在の特定領域研究)「人文科学とコンピュータ~コンピュータ支援による人文科学研究の推進」にありました。

人文科学とコンピュータシンポジウム(じんもんこん :-))

研究会とシンポジウムは, いずれも研究論文を予稿として提出した後に, 発表会でプレゼンテーションを行う形式が採られます。そこで活発に交わされる人文学・情報学双方の^{うんのう}蘊奥がこもった質疑やアドバイスには, 分離融合の CH 研究会の特徴がよく現れているといえるでしょう。

2006 年度の研究発表本数は, 4 回開会された例会で 33 本, シンポジウムは発表 53 件(うちポスター・デモ 17 件)とパネル討論・講演各 1 件でした。

「人文科学とコンピュータシンポジウム」は「じんもんこん」とも略称され, 「デジタルアーカイブ」を主テーマに毎年さまざまなサブテーマが立てられて開催される, CH 研究会の 2 大行事の 1 つで, このシンポジウムへの参加者・発表エントリー者数は, 毎年右肩上がりの増加ぶりを見せており, 2006 年度の「じんもんこん論文集」はついに 400 ページの大台を突破するに至りました。



☑ CH のマスコットキャラクター

研究会の登録数が 330 人ほどなのに対して, 発表本数が多いのは, 他研究会からも本シンポジウムへ多数エントリーがあるからです。

このシンポジウムで謳われている「デジタルアーカイブ」という概念は, ひと頃ほど取りざたされることは少なくなってきましたが, 人文科学の研究分野では, 今なおさまざまなところで新たな取り組みが進められており, その概念も幅広くかつ奥行き深いものへと変貌しつつあります。

さらに, CH 研究会会員と密接な関係を保ちながら開催されている「シンポジウム“人文科学とデータベース”」とも併せ, この研究会の裾野はますます広がりつつあります。

研究例会

定例の研究会も特徴あるものとなっています。中でも, 日本全国 47 都道府県での開催を進めてきたことなどは, その最たるものでしょう。

このことは, 研究会発足以来, 営々と受け継がれてきたことで, 2006 年 10 月 27 日の八戸工業高等専門学校での開催によって見事日本一周が達成されました。足かけ 18 年をかけての取り組みでした。

定例の研究例会の前日には, 懇親会や会場校のご厚意によるイベントが開かれ, 当然のことながら, 行く先々でさまざまな出会いもありました。研究例会の常連には, そうした巡り会いがきっかけとなった方々が少なくありません。

2007 年 1 月 26 日には, 日本一周記念特別シンポジウムが開かれました。その際には歴代主査が一堂に会し, 次の目標として, 日本 2 周目, 第 2 の「じんもんこん」とも称するべき, 特定領域研究プロジェクトを立ち上げることや, 海外開催などが企画として打ち出されました。

海外開催については, 2007 年 9 月に, 台湾で例会を国際シンポジウムとして開催するべく, 準備を進めています。

研究の特色

冒頭でもふれたとおり, CH 研究会は「人文科学分野へのコンピュータ応用」を目指す目的で設立されました。

会員には, 情報学を専門とする人だけでなく, 人文科学の専門研究者も多く参加しています(かくいう筆者も, 文学研究を専門としています)。

このように, さまざまな分野を専門とする人々が集まっておよそ人文科学にかかわる専門研究者とともに, コ

ンピュータを「共通語」として、衆知を寄せ合い、多彩な研究を繰り広げていることに、本研究会の特色があります。

研究会が機縁で、新たな研究が生まれることも少なくありません。

2005年度山下記念研究賞を受賞した研究「親族関係分析システム「アライアンス」による「宗門改帳」^{しゅうもんかいたちょう}分析の試み」(杉藤重信・川口洋)では、一夫多妻制の複雑な親族関係で知られるオーストラリア原住民アポリジニの調査・分析のために開発された「アライアンス」(杉藤)に、江戸時代の戸籍簿ともいうべき宗門改帳の調査データのために開発された人口分析システム「DANJURO」(川口)を適合させることによって、歴史人口学に新たな分析手法を提示するツールが誕生しました。すでに定評のある両氏の研究とシステムのコラボレーションが成り立ったのも、CH研究会があつてのことです。

そのほか、SIG-CHの研究活動には、博物館・図書館ほか、大きなプロジェクトに基づく機関係のデータベースやコンテンツとも積極的にかわり合い、密接に連携している研究も多くあります。

情報機器の性能向上によって、データ構築への取り組みよりも、すでにあるデータからいかに有用な情報を引き出すかという、知識発見が近年の研究の流行のようですが、CH研究会の研究には、それとはやや一線を画し、人文科学研究をより高次なものとするために、どのようにデータを作り、情報資源の基盤をどのように整備するかという、根幹部分にも真正面に取り組み続けている研究も少なくありません。

また、古典学(多言語処理を含む)の分野にかかわる人文研究者・機関係職員がCH研究会に数多く所属していることも際立った特徴といえましょう。このような研究分野は、情報技術の根幹にかかわる重要な分野ではあるものの、今なおそれを支える情報資源さえも十分に整っているとは言いがたい状況にあります。

よくいえば、未開拓の課題がふんだんに残されている分野ですが、それゆえにこそ、他とは異なるアプローチも数多く見られます。

たとえば、テキストデータを扱うに際しても、サンスクリットで記述された古文書を扱うために、文字セットを整えるところから出発した研究もあれば、日本の古文書OCRの実現のために、くずし字辞典のデータベースを作りあげることから出発した研究もあります。漢字セットの極限まで使用しながらも、なお外字を追加しつつデータベースを構築している研究もあれば、「祇園」と「祇園」の字形のどちらが多く使われているか、京都はおろか日本中を取材して規格文字を実証的に検証している研究もあるようです。

さらに、GISの応用研究では、旧暦時代の時空間を扱えるようにするために、膨大な情報資源を整えながらツールを開発していますし、モーショキャプチャを導入した研究では、古典舞踏を解析したり、画像処理を用い

て古典絵画のシミュレーション分析を行ったりなど、新しい技術と視点を導入することによって、果敢に伝統文化の研究に取り組んだりもしているのです。まさに人文情報学の名にふさわしい研究といつてよいでしょう。

近年の研究報告では、単に人文科学研究にコンピュータをどのように持ち込んだかというだけにとどまらず、それぞれの人文科学研究分野でどのような発見や新しい枠組みが提示できるようになったかなど、それぞれの人文科学研究領域においても新たな知見の発見と云うに値する報告も増えてきました。

人文科学とコンピュータの融合を目指して、文学、歴史学、あるいは考古学などの人文科学を専門としながら情報科学にも専門的に習熟した研究者を養成していかなければならないという自覚と使命感のもとに、CH研究会の活動は続けられてきたといえるのですが、研究成果の面においては、人文・情報両面で独特の結実を示しつつあるといえましょう。

その一方で、すでに洩れた発想や技術を導入したものであっても、確実性や実効性という意味で貴重な研究や事例報告も少なくありません。しかも採りあげられるコンテンツの事例や問題発見などのトピックには、現在構築中、計画中のものも多く、人文学と情報学双方にとっては、学際的アプローチという次元にとどまらず、ほかでは得られないホットトピックは刺激的です。これもCHの魅力の1つといえるでしょう(実際、本研究会の報告が前日の新聞に大きく採りあげられたことが何度もありました)。

今後の課題

以上述べてきたことから分かるように、CH研究会は、情報処理学会の中でも異色の存在かもしれません。情報処理学会組織にありながら、大会や論文誌において、CHにかかわる研究発表・論文投稿もあまりありません。その点は、本研究会の現状の課題だといえなくもないのですが、しかし、一方でCH研究の成果が、人文系諸学においても注目を浴び、紹介・引用されることも多くなってきました。中でも「じんもんこん」シンポジウムは、本研究会のみならず、本研究会の所属するフロンティア領域にとっても、情報処理学会大会以上の求心力を持ちはじめしており、このことが、こうした動向を加速しているといつても過言ではありません。

その意味で、人文情報学という学融合的学問領域を体現しているCH研究会には、さらなる展開が期待されているといえましょう。

(平成19年5月8日受付)

相田 満(正会員)

aida@nijl.ac.jp

1992年より国文学研究資料館文学形成研究系・助手。2005～2006年度CH研究会主査。専門は国文学、和漢比較文学、人文情報学。著書「和漢古典学のオントロジ」(勉誠出版、2007)。